

文化財 ニュース

9 Winter 2016

■ 平成27年度 特別展・各種講座 開催報告 特集号

文化財事務室では、毎年度文化財に関する展示を2回、各種講座を開催しています。

本号では、平成27年度に開催した事業と文化財調査の成果を紹介します。



Index

- 2 平成27年度文化財講座 開催報告
- 3 **史跡散歩** 桜田門外の変の目撃者「桜の井」
- 4-5 平成27年度特別展「馬琴と月岑—千代田の“江戸人”—」を終えて
- 6 常磐橋修理に伴う文化財調査の成果
- 7 **埋文ニュース** 筒井家屋敷跡の発掘調査
- 8 有償頒布刊行物の紹介

毎年10月下旬～11月初旬は、「東京文化財ウィーク」（東京都教育委員会主催）が開催され、都内でさまざまな文化財の特別公開や事業・イベントが企画されています。

千代田区でもこの機会に区内の文化財を身近に感じ、知っていただくため、毎年参加してきました。

今年度は、文化財事務室が主催する文化財特別展「馬琴と月岑—千代田の“江戸人”—」（平成27年10月13日～11月23日）の開催時期と重なり、この展示に合わせた講演会や担当学芸員による講座を企画しました。また、そのほかにも区内文化財めぐりや体験教室なども開催しました。

高麗門の扉が閉められた外桜田門（江戸城ウォーク）<写真右上>
特別展プレシンプोजウム「月岑学を考える」の風景<写真左上>

平成27年度文化財講座 開催報告

文化財事務室では、千代田区の歴史や文化に触れる文化財めぐりや各種講座を開催しています。今年度も各分野の当館学芸員が講師を務めた文化財講座や、小中学生を対象にした「こども体験教室」を開催しました。

●文化財めぐり

★「馬琴・月岑の足あと～神田界限を歩く～」

(11月1日)

特別展「馬琴と月岑」連動企画として開催した今回は、神田の地に暮らした曲亭（滝沢）馬琴と斎藤月岑の居宅跡をはじめ、それぞれにゆかりのある旧蹟をめぐろうというものです。

参加者一行は、①神田駅西口前→②佐竹稲荷→③一八稲荷→④真徳稲荷→⑤月岑居宅跡の石碑→⑥青物市場石碑→⑦出世稲荷→⑧エキュート神田万世橋→⑨昌平橋→⑩講武稲荷→⑪馬琴宅跡→⑫明神男坂→⑬神田神社（神田明神）というコースを2時間ほどかけてめぐりました。

神田地域の細かい町割りや坂・橋、そして稲荷社などから、2人の生きた江戸時代後期から幕末にかけての面影をたどり、ところどころで新たな発見をしていただきました。



★江戸城ウォーク（11月3日）

毎年開催している江戸城本丸（皇居東御苑）を中心とした文化財めぐりです。外桜田門では、東日本大震災による修復を終え、この日に合わせて高麗門を閉じて小扉から入場しました。外桜田門建物修復工事によって確認された調査成果などを解説し、二重橋→大手門→中之門→天守台→北桔橋門という、

特別史跡江戸城跡を案内しました。大名の登城路をたどりながら、主に江戸城の構造や石垣の歴史を解説しました。



●こども体験教室「そば打ち体験」

今年度の「こども体験教室」では、「そば打ち体験」を8月22日に実施しました。千代田区には江戸時代から続くそば屋の伝統が残っています。明治2年創業の神田錦町更科もそのひとつで、店主の堀井市朗さんに教わりながら、小学生たちが、そば打ちに挑戦しました。木鉢の中でそば粉がだんだん生地になっていく様子にはみんな興味津々で、中には茹で上がった麺をしげしげと見つめながら食べる子もいました。



桜田門外の変の目撃者「桜の井」

幕末から明治初期にかけて、幕府や明治政府の要人を目標とした襲撃事件が発生しています。千代田区内でも、九段北・紀尾井町・皇居外苑・永田町で事件がありました。

ここでは、一連の事件の発端となった桜田事変の概要と、関係する史跡を紹介します。

桜田事変は、歴史の教科書では「桜田門外の変」と呼ばれています。江戸城外桜田門外の路上で、大老井伊直弼の登城行列が襲撃された事件のことで

です。事件が起きたのは、安政7年3月3日（西暦では、1860年3月24日）です。3月3日は「上巳の節句」で、大名・旗本などが残らず登城する日でした。

当時は、火事で本丸御殿が焼失したため、西丸御殿（現在の皇居宮殿の場所）に幕府の機能が置かれていました。そのため、現在の皇居外苑一帯は、登城する武士で混雑していました。一説には、外桜田門を通過する行列があって、井伊家は待たされていたともいわれています。

事件当日は、3月には珍しく雪が降っていました。襲撃者たちは、行列の見物客を装い待ち構え、駕籠訴をするふりをして行列に近づき、襲いかかりました。彦根藩士たちは雪に備えて笠・蓑を身に付け、刀にも柄袋をかぶせていたため、刀をすぐ抜くことができず、襲撃を許してしまいました。

事件現場は、どのあたりでしょうか。記録によれば、「外桜田松平大隅守門前より上杉弾正大弼辻番所之間」と書かれています。松平大隅守門前は桜田門交差点、上杉弾正大弼辻番所は桜田濠端の都営バス停留所ですので、この辺りと思われる。

井伊家上屋敷は外桜田（現在の国会前庭一帯）で、表門は国会前交差点の中央付近にありました。上屋敷から現場までは200m程度でしたが、襲撃はほんの短時間で終わったため、事件を知った井伊家からの加勢も間に合わなかったようです。井伊直弼は殺害され、お供の藩士たちは即死や負傷しています。

襲撃後、首謀者たちは老中に訴え出るため、堀端を回って逃走しました。また、井伊直弼の首は、現在のパレスホテル付近まで運ばれました。

記録によれば、事件の様子は上杉家辻番所の番人と松平大隅守から、逃亡の様子はそれぞれの門番や

辻番所番人から、幕府に報告されました。幕府からは対応が疎かであるとして、それぞれ沙汰待ち・差控えの咎めが申渡されますが、事件の噂を広めないためと思われます。

事件から156年もたちましたが、現在でも三宅坂や桜田濠の堀端、外桜田門などが点在し、当時の面影を残しています。その中で、国会前交差点のそばにある石製の井戸枠（東京都指定旧跡）は、表門前の番屋の脇にあった「桜の井」の井戸枠です。元々は、国会前交差点付近にありましたが、道路改良で現在の場所に移設されています。この井戸は、江戸の名水の一つとして錦絵などに描かれ、『江戸名所図会』には三連の石製井戸として掲載されています。

重要文化財である「旧江戸城外桜田門」とともに、襲撃の様子を遠くから目撃していたはずで

（高木知己）

桜の井『江戸名所図会』



桜の井

特別展「馬琴と月岑」余話

特別展「馬琴と月岑」では、19世紀に千代田地域に居住したこの2人の江戸人を紹介しましたが、今回は展示で取り上げられなかった話題をご紹介します。

千代田区立日比谷図書文化館文化財事務室では、今年度の特別展として「馬琴と月岑—千代田の“江戸人”—」を開催しました。この展示は、区内に2ヶ所も史跡があり、誰もが知る著名人である曲亭馬琴(1767～1848)と千代田の関わりと、「知る人ぞ知る」人物である斎藤月岑(1804～78)を多くの方々に知っていただきたいというのが大きな目的でした。しかも両者は同時代を生きた人物であり、共通の仲間や友人も少なくないという間柄でした。

展示ではそんな2人とその周辺の交友関係から、江戸時代後期の千代田を読み解いていきましたが、ここでは収録できなかった2人のその後について、明治時代の記事からご紹介します。

■馬琴の晩年

馬琴といえば、訪問客の多いことで有名で、諸藩の藩士や戯作者・版元・絵師・儒学者・国学者・書家・医師・商人など実に幅広く、これらは今回の展示でも出品した「滝沢家来訪往来人名簿」(早稲田大学図書館所蔵)に詳細に記録されています。

馬琴はある時期から、これらの訪問客が著述の妨げになると感じ、知人の紹介状に菓子料として金1分(1両の4分の1。現在の価値では、3万円程度)を添えて持参しないと面会できないこととしました。

千代田の地に長らく住んでいた馬琴は、天保7年(1836)、四谷信濃坂に転居し、亡くなるまでの12年間をここで過ごしました。明治大正期の作家・新聞記者宇田川文海(1848～1930)は、明治39年(1906)8月12日の「時事新報文芸週報」に晩年の馬琴について記しています。ここではそこからうかがえる馬琴の姿をみていきましょう。

文海が15～16歳の頃、知り合いの文学好きのおばあさんから聞いた話として紹介されている話によれば、そのおばあさんが若い頃、金1分と紹介状を持って馬琴宅を

訪れると、馬琴は初対面の彼女に対し、挨拶もそこそこに、「あなたの出身はどちらですか?」「お国には何々という山があるはずですが、どういう姿をしていますか?」「何々という名所旧跡は今はどうなっていますか?」「何々という名物は今でも昔の形を残していますか?」「何々神社の祭典にはこれこれの古式があると聞いていますが、今でもやっていますか?」などと、次々に質問を投げかけ、少しでも参考になる情報が得られれば詳細に手帳に書き留めていたといいます。訪問客にしてみれば、これでは馬琴から知遇を得るところではなく、馬琴が画や賛を書いた扇子や短冊を土産にもらって帰るばかりだったようです。

また文海が12～13歳の頃に地元の老人から聞いた話によると、晩年の馬琴は目が見えないのでお供の人に手を引かれて四谷あたりの湯屋に通っていたようですが、風呂場の片隅で小さくなって湯浴みをし、そそくさと出ていくのが常だったといいます。しかし、その場に居合わせた人が気付くと、「ソレ先生が見えた」と云って、一同場を譲り、手を執らぬばかりに尊敬し「忽ち水を打ったように一時に沈静に帰し」というありさまで、普段騒がしい風呂場も、馬琴の入浴している間は誰ひとり大きな声で話をするとはなかつ



『南総里見八犬伝』第9輯巻53下 挿絵

○齋藤月岑の
岑は。名を幸成といひ。別號を白雪堂といふ。通稱市左衛門。歴世文事を好み。月岑に至り名聲大に振ふ。江戸名所圖會は。三世苦心して大成せしものにて。世の賞する所たり。其の他月岑の著述には。東都歳事記、武江年表、聲曲類纂等あり。其の居住地は。丹後殿前即ち雉子町なりし。聲曲類纂丹前と題する條下に。丹前はれのれが家代々住居なす地なればとあり。以て証とすべし。著書には太抵東都神田どのみ記せり。同家は拾一番組の名主にて。雉子町、三河町三丁目、同裏町、同四丁目、同裏町、四軒町を支配せしこと。江戸町鑑に見えたり。

たと記しています。

なお、幕末から明治中期に活躍した戯作者・新聞記者の仮名垣魯文（1829～94）は、まだ商家の奉公人だった20代の頃に、条野伝平（1832～1902）に誘われて馬琴宅を訪ねたところ、「世に戯作者ほどはかないものはない。左様な志願はやめにして、忠実に主人に勤め、将来立派なる商人になれ」と滔々と戒められ、短冊に一首の和歌を書いて渡されたそうです。

ちなみに、条野伝平は「山々亭有人」の号をもち、のちに神田区議会議員となった人物で、仮名垣魯文は条野や梅素亭玄魚（宮城呂成、1817～80）とともに三大咄の会である粋狂連を立ち上げています。

■語り継がれる月岑

今回の展示で『江戸名所図会』の筆耕は、馬琴の弟子にあたる岡山鳥（？～1828）や、前述の梅素亭玄魚が担当していたことをご紹介しますが、馬琴と月岑の父幸孝、そして岡山鳥の世代から、月岑や玄魚・魯文・条野の世代へと移行していったことを示しています。

一方の月岑についてもその後の話をご紹介します。

明治29年（1896）9月から明治42年（1909）3月にかけて、『風俗画報』の臨時増刊として『新撰東京名所図会』が出されましたが、これは月岑が祖父・父の仕事を引き継いで刊行させた『江戸名所図会』の明治東京版というべきもので、同書もやはり綿密な地誌の考証と、豊富な挿絵によって構成されています。

このなかの神田区雉子町に「齋藤月岑の宅」の項目があり、「齋藤月岑は名を幸成といひ、別号を白雪堂といふ。通稱市左衛門。歴世文事を好み、月岑に至り名声大に振ふ。江戸名所図会は三世苦心して大成せしものにて、世の賞する所たり。其の他月岑の著述には、東都歳事記、武江年表、声曲類纂等あり。其の居住地は、丹後殿前即ち雉子町なりし。声曲類纂丹前と題する条下に、丹前はれのれが家代々住居なす地なればとあり。以て証とすべし。」と紹介されています。

同書が出された明治中期には月岑はすでに地域の著名人となっていたわけですが、月岑は死去する数年前にそれまで住んでいた雉子町を離れたようです。

月岑は最初の妻れんとの間で4男4女、後妻まちとの間に幸盛（松之助）をもうけ、姉の子幸道（亀之

丞）を養子に迎えています。しかし、子供たちの多くは早世してしまい、れんとの間の子である幸知（喜之助）と、まちとの子である幸盛だけが子孫を伝えています。

幸知は明治7年（1874）10月に大蔵省貨幣寮の監査役となり、のちに国立第一銀行の行員となります。また、幸盛は明治30年頃にアメリカに渡り、15年後に帰国しています。

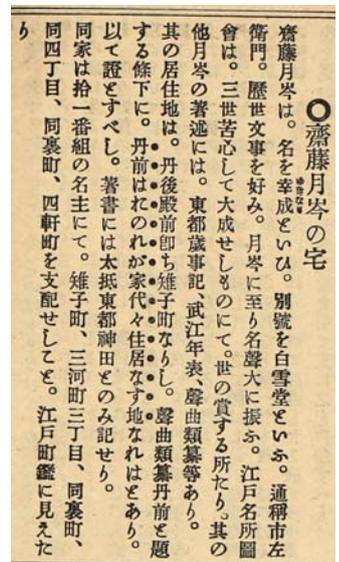
こうして齋藤家は月岑ののち、神田の地を離れ、近代の経済界で活躍していったわけです。なお、幸盛の子である齋藤武雄氏（1912～94）は『江戸市井人一月岑伝』を著し、月岑の足跡を紹介しています。

神田を拠点に活動する「市井人・齋藤月岑に学ぶ会」の方々は、同書に触発されたところもあり、十数年にわたる活動のなかで、この武雄氏のご子孫を探し出し、毎年『翟巢通信』に活動成果を発表され、10月3日に開催したシンポジウムでは、その一部を紹介していただきました。

今日我々が江戸のことを調べるときに、何気なく『江戸名所図会』や『東都歳事記』『武江年表』の記事や挿絵を目にしています。それらがいずれも齋藤月岑が世に送り出した書であることは近年少しずつ認知度を高めています。月岑自身については、それほど知られているわけではありません。

今回の展示では、馬琴という有名人を助っ人に迎え、これまで渋い脇役に甘んじていた感のある月岑を馬琴と並ぶ千代田を語る上で重要な「江戸人」と捉え、

「ダブル主役」として紹介しました。2人の存在や足跡が現代にいかに関わり継がれているかを今後も実感していただければと思います。
(滝口正哉)



『新撰東京名所図会』
「齋藤月岑の宅」記事

常磐橋の修理工事の成果

現在、千代田区では東日本大震災で被災した常磐橋の修復工事を行っています。江戸城外郭正門であった常盤橋門は、明治6年(1873)に撤廃され、それまでの木橋を撤去し、明治10年(1877)に小石川門の石垣石材を使って、二連アーチ石橋の常磐橋が架けられました。その特徴は、歩車道分離、大理石による八角形の親柱に洋風の笠を付けるなど、国内でも珍しい文明開化の面影を残しています。

また、壁石を橋のアーチ曲線に合わせて、切石を同心円状に積むという、それまでの石造アーチ橋にはみられない技術も採り入れ、全体的なデザインは和洋折衷という印象を受ける橋で、丸の内や日本橋に点在する近代の歴史遺産とともに、この地域の歴史を彷彿とする文化財となっています。

明治初期の石造アーチ橋は、薩摩や肥後など石橋築造を得意とした石工を招聘して、明治6年の萬世橋を皮切りに12の石橋が架設されていきました。その配置は、主要街路や重要な商業地など都市の要所に建設されていきました。そのなかでも常磐橋は、多大な経費を費やして完成した橋で、錦絵や名所絵葉書などに登場する東京の名所となっていました。当時は白い大理石の親柱や路面の花崗岩、洒落たデザインの高欄手摺柵など、ほかの石橋に比べてかなり特徴ある橋でした。

都内の石橋は、明治後期の市区改正や大正から昭和初期の震災復興によりコンクリートや鉄の橋に架け替えられていきました。しかし、この常磐橋は、西洋文化を橋の上に現した最初の橋として、市民運動によって保存が決まり、関東大震災復興後の昭和3年(1928)に国の文化財に、昭和9年には史跡公園の常盤橋公園となり、城門石垣とともに保存されました。

千代田区が実施する解体修理に伴う文化財調査によって、明治時代の技術が少しずつ明らかになってきました。

まず、石橋石材の裏側から、小石川門の石垣を築いた岡山藩池田家を示す「◇」の刻印が多数発見されました。このことから、常磐橋の石材の多くが小石川門からの転用材であることが明らかとなりました。また、沖積地の軟弱地盤

であることから、基礎構造は非常に堅牢なものであることが確認されました。その構造は、地盤深く「地形杭」を打ち込み、その上に「十露盤」「捨土台」という土台を置いて不等沈下を防ぎ、「根石」でアーチ輪石などを支えるものとなっていました。

こうした文化財調査を通して、在地の石垣基礎構造を応用した技術と九州の石橋築造技術の融合によってこの石橋が築造されたことが判明しました。さらには路面や親柱、高欄を造った当時の先進技術も明らかとなり、この橋が江戸・東京の中心地を示す文化財であることが改めて確認できました。

(後藤宏樹)



輪石裏側で発見された小石川門石材の刻印



解体修理前の常磐橋



橋脚下部の基礎構造

筒井家屋敷跡の発掘調査



平成27年度は筒井家屋敷跡として知られている二番町14番地を発掘調査しました。調査の結果、旗本屋敷に関わる遺構や遺物が発見され、千代田区としては85番目の新発見の遺跡となりました。

■調査に至る経緯

本調査地は屋敷絵図に残る数少ない旗本屋敷のひとつである筒井武左衛門（家禄高：2700石）の屋敷地であり、それに関わる遺構や遺物が残っている可能性があったため、日本テレビ麹町新スタジオ棟建設に伴い、試掘調査および発掘調査をしました。



発掘調査全景（B区）

■地理的・歴史的環境

調査地は千代田区二番町14番地に所在し、千代田区のなかで最も高い標高である約30mの麹町台地上に位置しています。江戸時代から二番町周辺は坂道が多い反面、街区が整然と区割され、番町一帯は旗本の武家屋敷が軒を連ねていました。番町は台地上に面した地域を「表番町」、谷に面した地域を「裏番町」と呼んでおり、調査地は「表二番町」にあたります。日テレ通りは「善国寺谷通り」となります。

江戸時代における本調査地は17世紀前葉は不明ですが、久保氏、大嶋氏、水上氏、筒井氏と屋敷地が変遷します。筒井家は19世紀中葉から幕末まで拝領し、『旗本上ヶ屋敷図』（東京都公文書館所蔵）には、「筒井武左衛門殿屋敷絵図」が残っています。

■発掘調査の成果

平成27年5月19日から7月25日にかけて断続的に発掘調査を行い、江戸時代を中心に近代までの遺構が約59基検出され、少ない調査面積にも関わらず、多岐にわたる遺物が発見されました。

江戸時代の遺構としては17世紀前葉の上水施設や溝が発見され、江戸時代の早い段階からこの土地が利用されていたことが分かりました。また18世紀後葉から19世紀前葉において2基の地下室や食物の残滓と考えられる貝や魚骨が出土した土坑が検出されました。地下室からは高級陶磁器の大皿や大碗、茶の湯の道具、旗本の子どもの遊んだと考えられる馬や鳩の土製品など多くの遺物が出土し、番町に住んでいた上級旗本の生活の一端を示す資料となりました。この時期の遺構や遺物は水上氏や筒井氏の屋敷地に関わるものと考えられます。

表長屋背面の空閑地には地下室、屋敷地東側は瓦や生活雑器などを廃棄した比較的大規模な土坑が検出され、発掘調査から屋敷絵図には記載されていない空間部分が明らかになり、典型的な旗本屋敷の空間構成であったということが分かりました。（小杉由希子）



出土遺物（磁器）



出土遺物（陶器）

文化財事務室 有償刊行物一覧

以下の刊行物は、日比谷図書文化館及び千代田区役所2階総合窓口課にて販売しています。
また、郵送でも購入できますので、詳しくは、日比谷図書文化館文化財事務室までお問合せ
ください。

平成28年2月26日現在

刊行物名	価格(円)	発行年度
開館記念特別展示(四番町歴史民俗資料館)	350	昭和61年度
特別展(矢立)	300	昭和62年度
江戸からの大工道具	350	昭和63年度
土器が語る原始・古代の暮らし	350	平成元年度
紀尾井町遺跡展	400	平成2年度
千代田の暮らしと劇場	500	平成5年度
火事と喧嘩は江戸の華	500	平成6年度
戦時下の暮らしと子供たち	500	平成7年度
お正月の暮らしと遊び	500	平成8年度
街の再発見	500	平成9年度
発掘が語る千代田の歴史	500	平成10年度
アーネスト・サトウとその家族	300	平成11年度
明治・大正の大学案内	200	平成13年度
暮らしの中の印	100	平成13年度
飯田町遺跡展	100	平成14年度
吉宗も暮らした紀伊家上屋敷	200	平成18年度
日比谷図書文化館常設展示図録	700	平成24年度
徳川將軍家の器	1,000	平成25年度
鎌倉と江戸—中世と近世の武士—	500	平成25年度
千代田“新発見”	400	平成26年度
千代田の文化財で綴る江戸・東京の歴史	500	平成26年度
学童疎開からみる子どもたちの生活	400	平成27年度
馬琴と月峯 -千代田の“江戸人”-	500	平成27年度

刊行物名	価格(円)	発行年度
平河町遺跡	2,150	昭和61年度
民具Ⅰ	1,000	平成2年度
民具Ⅱ	1,000	平成3年度
目で見る千代田の歴史	1,500	平成5年度
一番町遺跡発掘調査報告書	2,600	平成6年度
文化財探訪	1,000	平成7年度
民具Ⅲ	1,000	平成8年度
収蔵資料目録 1	1,000	平成9年度
収蔵資料目録 2	1,000	平成10年度
岩本町二丁目遺跡	1,400	平成13年度
江戸の郷土誌	1,500	平成14年度
収蔵資料目録 3	200	平成16年度
ある商家の軌跡	1,000	平成18年度
史跡江戸城外堀跡保存管理計画書	1,700	平成20年度
原胤昭旧蔵資料調査報告書(1)	850	平成20年度
原胤昭旧蔵資料調査報告書(2)	700	平成21年度
千代田の古文書	900	平成21年度
原胤昭旧蔵資料調査報告書(3)	900	平成22年度
ある蔵書家の書棚	900	平成22年度
弥勒寺・栖岸院跡	1,400	平成22年度
千代田の記憶—区内生活史調査報告書—	700	平成22年度
原胤昭旧蔵資料調査報告書(4)	1,200	平成23年度
ある官僚一家の近代	500	平成24年度
あの日のぼくら	700	平成24年度
千代田の古文書2	1,000	平成25年度
文化財マップ	50	平成25年度
ある商家の軌跡2	1,000	平成26年度
疎開日誌-区内幼稚園・小学校関係資料調査報告書	800	平成27年度



都営地下鉄 ●三田線—「内幸町駅」徒歩3分
 東京メトロ ●千代田線
 ●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
 ●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10:00～22:00
 土 10:00～19:00
 日・祝 10:00～17:00

文化財事務室 月～金 8:30～17:15

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。

休館日 毎月第3月曜日
 年末年始
 特別整理期間

文化財ニュース 第9号 (2,000部)

発行日 平成28年2月26日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
 〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
 TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
 HP: <http://hibiyal.jp/bunkazai/index.html>
 e-mail: rekimin@vesta.ocn.ne.jp

印刷 株式会社 報光社